The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	共鳴する源氏物語 ： 花の枯れ枝をさしだすこと
Author(s)	加藤, 昌嘉
Citation	語文. 1997, 69, p. 32-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

共鳴する源氏物語

――花の枯れ枝をさしだすこと――

加藤昌嘉

一　源氏物語の中で　無数の細部が共鳴している

『源氏物語』には中心もなければ背骨もない。ただ、テクストに散在する身振りや姿態、言葉や事物といった諸細部が、あちこちで共鳴共振しているだけだ。

或る細部は、幾帖も距たった他の諸細部と連動し重合することで、更なる力、新たなる意味を発現する。さような諸細部の響き合いを触知すること、さようなテクストの機構を明らめることが、本稿の目的である。

就中、次の「横笛」巻のくだりには、そこかしこの細部細部との強い共鳴を見せる、力能を持った身振りがある。

大将［夕霧］は、この君［薫］をまだえよくも見ぬかなとおぼして、御簾の隙よりさし出でたまへる［薫］に、花の枝の枯れて落ちたるを取りて見せたてまつりて、招きたまへば、走りおはしたり。二藍の直衣の限りを着て、いみじう白う光りうつくしきこと、皇子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶときよらなり。なま目とまる心も添ひて見ればにや、眼居など、これ［薫］は今すこし強うかどあるさままさりたれど、まじりのとぢめをかしうかをれるけしきなど、［柏木に］いとよくおぼえたまへり。

（横笛　三三七頁～）

「横笛」巻末近く、亡き柏木が現れた昨夜の夢を気掛かりにしつつ光源氏のもとを訪れた夕霧が、《花の枯れ枝》をさしだして幼い薫を招き寄せる場面であるが、ここで注目すべきは、「花の枝の枯れて落ちたるを取りて見せ」るという身振りだ。

この夕霧の仕種については、玉上琢彌氏が「おいでおいでをする。相手をしよう、という態度を示したのだ。」と述べる[1]以外、古註釈から現代の註釈書まで、意義や意味合いが説かれることも、引歌や引詩が指摘されることもない。また近年、野口武彦氏を始め、河添房江氏や原岡文子氏らによって[2]、「花の暗喩（フローラルメタフォア）」だの「花の象徴（フラワーシンボリズム）」だのが言挙げされたものの、このくだりへの言及を見ることは出来なかった[3]。

主題や構造といった大いなる観念への志向によって、瑣末な断片、取るに足らぬ細部として貶置される、かような仕種や姿態は、しかし、僅かな強度、微かな顫動を以て確かにそこに顕現している。

今回は、この《花の枯れ枝をさしだす》という身振りが、『源氏物語』の諸細部と如何なる共鳴を成し、如何なる重合を果しているのかを辿り見てゆくことにする。

二　花の枯れ枝は　横笛の代わりとしてある

まず、このくだりが「横笛」という巻に於いてどのような連続系の上にあったかを想起することから始めよう。

巻頭、柏木の一周忌法要の様子が語られた後、朱雀院から女三宮に贈られた筍を、幼い薫が咬み齧るくだりがある。

［薫は］この筍の罍子に、何とも知らず立ち寄りて、いとあわたたしう取り散らして、食ひかなぐりなどしたまへば、……御歯の生ひ出づるに食ひあてむとて、筍をつと握り持ちて、雫もよよと食ひ濡らしたまへば、［光源氏］「いとねぢけたる色好みかな」とて、

憂き節も忘れずながらくれ竹のこは捨てがたきものにぞありける　（横笛　三二三頁～）

前稿では、[4] この筍が、笛竹ならざる笛、未成熟の笛としてあること、及び、筍にしゃぶりつく薫の仕種が《笛吹く》身振りの擬態としてあることを述べ、幼い薫が、『源氏物語』の中で一度として《笛吹く》身振りを表し得なかった柏木の代行者としてあること、そしてそれが健気で虚しい代理行為であることを論じた。「横笛」という巻は、柏木哀悼に続き、未だ手にせぬ形見の笛を吹かんとするその子薫を語っているわけだ。

続いて、夕霧が落葉宮のもとを訪れて琴の掻き合せなどをし、帰らんとするところに、宮の母＝一条御息所が「御贈り物」に柏木の形見の笛を「添へてたてまつりたまふ」くだり。それは、生前、柏木自身が、

「みづからも、さらにこれが音の限りは、え吹きとほさず。思はむ人にいかで伝へてしがな」と、をりをり聞こえごちたまひし　（横笛　三三〇頁）

ものだという。

続いて、亡き柏木が夕霧の夢に現れるくだり。

夕霧が三条殿に帰ると、もう既に「皆寝たま」うた様子。独り、落葉宮のこと御息所のこと、妻雲居雁のことなどを想いつつ臥し、眠りに就いたころ、その夢枕に柏木が立つ。

すこし寝入りたまへる夢に、かの衛門の督［柏木］、ただありしさまの袿姿にて、かたはらにゐて、この笛を取りて見る。夢のうちにも、亡き人の、わづらはしう、この声を尋ねて来たると思ふに、

［柏木］「笛竹に吹き寄る風のことならば末の世長きねに伝へなむ

思ふかた異にはべりき」と言ふを、問はむと思ふほどに、若君［夕霧の子］の寝おびれて泣きたまふ御声に、［夕霧は夢から］さめたまひぬ。　（横笛　三三三頁）

《笛吹くこと》ならず、筍＝未成熟の笛にしゃぶりつく姿をしか表し得なかった薫にこそ、柏木の笛は伝えられるべきであった。しかし、かように子の存在が仄めかされながら、[5] その笛は夕霧に渡り、彼によって吹かれもする。そうであってみれば、その笛を「我が子孫に伝えてほしい」「あなたに伝えたかったわけではない」という遺恨を持った柏木が、わざわざ夕霧の夢に現れるのも首肯けるとい

うものだ。

結局、「思ふかた異にはべりき」とはいうものの、一条御息所が「引き出でたまへりし」ものを「仏の道におもむけむ」のもあっけなさすぎよう、ということで、夕霧はともかくも笛を携えて「六条の院に参りたまひぬ」。そこには、匂宮や二宮といった明石女御腹の皇子たちも、そしてもちろん「宮の若君」＝薫もいた。

そこでようやく、最初に掲げた《花の枯れ枝をさしだす》場面となる。

すなわち、この「横笛」巻の展開を考えるに、薫に《花の枯れ枝をさしだす》くだりに於いては、夕霧は、その懐中に、収まるべき場所を失した、宙吊りの、浮游する笛を有している、と見なければなるまい。この笛は、夢に現れた柏木の訴え通り、その子孫すなわち薫に譲渡されるべきものであった。ところが、笛は、最終的には夕霧を経て光源氏の手に収まることになる。

つまり、夕霧によってさしだされたその《花の枯れ枝》は、薫に直接渡されるはずであった笛の代わりなのだ。それは、その代用という意味で、偽りの横笛といってもよい。

但し、それが夕霧の考えで以てなされた、などということでは、いささかもない。「横笛」巻の連続系の上で、夕霧からさしだされた《花の枯れ枝》が、本来薫に受け渡されるべきであった柏木の笛の代替物として機能するということだ。

結局、柏木の遺言、形見の横笛は、いずれも光源氏に回収されて終り、それ以降、遺恨を持った柏木が、誰かの夢に現れたり物怪になったりすることはない。夕霧の措置は、柏木の意向に背くものではなかったということだろうか。或いは、柏木の笛の問題は、「横笛」「宿木」二巻だけの懸案事項なのだろうか。

この後、笛の代わりとしての《花の枯れ枝》は、柏木から薫へとその強度の志向を組み込み換え、新たな力動を発し始める。だが、これについて考えるのは、もうしばらく後になるだろう。

三　蹴鞠の庭の桜が　薫の桜に折り重なる

「横笛」巻に於いては、《花の枯れ枝》は、笛の代わり、偽りの笛として存在していた。だが同時に、それをさしだした夕霧の姿態は、巻を距てた別の細部細部でなされた同様の身振りと共鳴すべく新たな稼働を始める。

「若菜上」巻、誰もが知る蹴鞠の場面。

三月の末頃だろうか、六条院に集い蹴鞠に興じる若人たちに、桜花が飄姚と散りかかる。夕霧は、その庭を眺めながら、御階に座っている。(6)

軽々しうも見えず、ものきよげなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれば、うち見上げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中のしなのほどにゐたまひぬ。

（若菜上　一二六頁）

一方の柏木は、蹴鞠の庭に佇み、夕霧と言葉を交しながら女三宮のいるであろう方に目を向けた。

督の君［柏木］続きて、「花、乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」などのたまひつつ、宮［女三宮］の御前のかたを後目に見れば、例の、ことにをさまらぬけはひどもして、色々こぼれ出でたる御簾のつま、透影など、春の手向の幣袋にやとおぼゆ。

（同右）

例の「唐猫」の登場によって、柏木が女三宮の立ち姿を覗き見ることになるこの後のくだりについては贅言を要しまい。今ここでは、散りゆく桜のもとにいる柏木と、「しをれたる枝」＝《たわんだ桜の枝》を手にする夕霧とに目を据えよう。

「横笛」巻で夕霧が薫にさしだした《花の枯れ枝》は、「若菜上」巻と同じく桜のそれであった。かたや晩春、かたや仲秋ではあるものの、光源氏の君臨する六条院という同じ空間に於いて、《花の散り落ちた枝》を手にしたこの二つの夕霧の姿態は強く共鳴し合う。柏木－女三宮の密通、薫の誕生、柏木の死、女三宮の出家……という一連の事件を知る人物の同じき姿態を蝶番にして、柏木と薫とが重合する。夕霧の《花の枯れ枝をさしだす》身振りによって、蹴鞠の庭という密通事件の端緒と、不義の子薫というその残滓とが、折り重なり合う。

この後、夕霧は、光源氏に柏木の遺言を告げ、その笛を托すのであったが、柏木の遺恨が光源氏に回収されてしまう直前に置かれたこの一場面の上に、あの蹴鞠の庭が再現前化するというわけだ。

四　花の枯れ枝は　死した柏木と連接してある

「若菜」巻に於いては、桜との連接を成す存在者として、まず女三宮を挙げるべきかも知れない。例えば、「若菜上」巻末に置かれた、柏木及び小侍従の歌。

［柏木］よそに見て折らぬ嘆き［＝木］はしげれどもなごり恋しき花の夕かげ　（若菜上　一三四頁）

［小侍従］いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと[7]　（若菜上　一三六頁）

なるほど、女三宮は桜に譬えられる人物ではある。しかし同時に、柏木という人物も、桜との連接を果し、その喩を纏う存在者なのであった。

亡きその人を悼喪する巻「柏木」。

「御前の木立いたうけぶりて、花は時を忘れぬけしきなる」晩春、夕霧が、柏木の死を悼み哀しむ落葉宮、その母一条御息所を弔問するくだり。

御前近き桜のいとおもしろきを、「今年ばかりは」とうちおぼゆるも、いまいましき筋なりければ、「あひ見むことは」と口ずさびて、

［夕霧］時しあれば変らぬ色ににほひけり片枝枯れにし宿の桜も

わざとならず誦じなして立ちたまふに、いととう、

［御息所］この春は柳の芽にぞ玉はぬく咲き散る花のゆくへ知らねば　（柏木　三〇八頁～）

夕霧の歌では、落葉宮が「変らぬ色に」匂う「宿の桜」によそえられる一方、柏木は「枯れにし」「片枝」に譬えられている。[8] 柏木は《枯れてしまった桜の枝》なのだ。

更に、夕霧が、柏木の父である致仕大臣のもとを訪れたくだり。

「夕暮の雲のけしき、鈍色に霞みて、花の散りたる梢どもをも、今日ぞ目とどめたまふ」致仕大臣が、御息所の先の歌「この春は……」がしたためられた畳紙を見て歌を作すのに続き、夕霧、弁君＝柏木の弟が、唱和をする。

［致仕大臣］木の下の雫に濡れてさかさまに霞の衣着たる春かな

大将の君、
［夕霧］亡き人も思はざりけむうち捨てて夕べの霞君着たれとは
弁の君、
［弁君］うらめしや霞の衣誰着よと春よりさきに花の散りけむ
（柏木　三一一頁）

先に挙げた御息所の歌に於いては、「咲き散る花」＝咲き誇った後に散ってゆくだろう桜に、「ゆくへ」の案じられる落葉宮が重なるが、「花の散りたる梢」のもとで詠まれたこの弁君の歌に於いては、「春よりさきに」散ってしまった桜に、亡くなった柏木が重なる。

満開の桜の木にあっては「枯れにし」「片枝」に譬えられ、散りゆく桜の木にあっては「散りけむ」花によそえられる亡き柏木は、常に《枯れた花》《散った桜》と折り重なってある。

ここに於いて、《枯れた花》《散った桜》と連接する柏木が、最初に掲げた「横笛」巻のくだりと繋がる。すなわち、秋であるにもかかわらず、というか或いは、秋という季節に相応しく、夕霧から薫にさしだされた「枯れて落ちたる」「花の枝」に、柏木の姿態が重なるのだ。夕霧から薫への《花の枯れ枝》は、亡き柏木そのものとして呈示されてある。

五　花の枯れ枝は　沈淪せる身体を背負ってある

これまで辿り見て来たのは、いずれも「若菜」「柏木」「横笛」という直線的な連続系に於ける重合であった。ここからは、夕霧が《花の枯れ枝をさしだす》くだりが、その身振りの力動によって、或いはその関係性の波動によって、距たった他の巻の諸細部と手を結ぶ、その共鳴の様相を眺めてゆくことにする。

「きさらぎの十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛り」のころ、朝顔斎院から光源氏のもとへ薫物競べのための品々とともに文が贈られて来る、「梅枝」巻のくだり。

前斎院［朝顔］よりとて、散り過ぎたる梅の枝につけたる御文持て参れり。
（梅枝　二五五頁）

この枝は、その消息にあった次の歌と連動する。

［前斎院］花の香は散りにし枝にとまらねどうつらむ袖に浅くしまめや
（梅枝　二五六頁）

「散り過ぎたる梅の枝」、歌句「散りにし枝」は、もちろん自己卑下ではあるものの、さだ過ぎた朝顔斎院自身を表してある。

或いはまた、彼の地へ赴かんとする光源氏が王命婦のもとに春宮＝冷泉への別れの便りを送る、「須磨」巻のくだり。

春宮にも御消息聞こえたまふ。王命婦を［出家の身の母藤壺の］御かはりとて［春宮のもとに］さぶらはせたまへば、その局にとて、……
（須磨　二二一頁）

「今日なむ都離れはべる」で始まる光源氏のこの「御消息」の文面は挙げるまでもあるまい。ただ、

［光源氏］いつかまた春の都の花を見む時うしなへる山賤にして
（同右）

なる歌がその文の末に添えられており、しかもそれが、

桜の散り過ぎたる枝につけたまへり。
（同右）

というものであったことに留目しよう。

かたや春宮の方では、次のような遣り取りがあった。

［王命婦］「かくなむ」と御覧ぜさすれば、幼き御ここちにも、まめだちておはします。［王命婦］「御返りいかがものしはべらむ」と啓すれば、［春宮］「しばし見ぬだに恋しきものを、遠くはましていかに、と言へかし」とのたまはす。ものはかなの御返りやと、あはれに見たてまつる。（同右）

このいじらしくも頼りない春宮の代わりに、王命婦によって返歌が詠まれた。

［王命婦］咲きてとく散るは憂けれどゆく春は花の都を立ち帰り見よ[9]
時しあらば。[10]（須磨　二二二頁）

光源氏の歌では、自身＝「時うしなへる山賤」であるし、王命婦の歌では、光源氏＝「花の都を立ち帰り見」る「春」であって、確かにここでは、光源氏＝《枯れた桜》となるわけではない。だが、ここで、「明石」巻の次のくだりとの連繋を見よう。

［光源氏は］ほどもなく、もとの御位あらたまりて、数よりほかの権大納言になりたまふ。つぎつぎの人も、さるべき限りはもとの官返し賜はり世にゆるさるるほど、枯れたりし木の春にあへるここちして、いとめでたげなり。（明石　三〇五頁～）

帰還し復官を果した光源氏及びその部下たちの、この「枯れたりし木の春にあへるここち」との連接によって、「須磨」巻の「桜の散り過ぎたる枝」に、「時うしなへる」光源氏の沈淪せる姿態が重合する。[11]送り手自身の表象として、その《花の枯れ枝》はある。[12]

そうであるならば、「横笛」巻に於いて夕霧がさしだした《花の枯れ枝》にも、「柏木」巻との連繋のみならず、他の巻々の細部との共鳴によっても、やはり、虚しく散っていった柏木の身体、或いはその存在そのものが賦与されているといえよう。

六　花の枯れ枝は　不義の子への符牒としてある

ここまで、《花の枯れ枝》に、夭逝した柏木、容色衰えた朝顔斎院、沈淪せる光源氏という、その枝の送り主それぞれの存在が托されている様を眺めて来た。ただ、かような定位も、喩とか反復とかいった概念を以てする理会に過ぎまい。しかるに、就中、「横笛」巻と「須磨」巻とは、その身振り、その関係性によって、より強い共鳴を以て邂逅している。

「須磨」巻では、零落せる光源氏をよそえた《散り過ぎた桜の枝》が、[13]王命婦という人物によって中継ぎされていたことに注目しなければならない。この女性が、「賢木巻で藤壺に従って出家しているので、今、東宮に伺候しているのは不可解。作者の不注意か。[14]」という疑義を呈されながら、それでもなおここに儼存していることの、その機能を惟みよう。

この王命婦は、「若紫」～「賢木」巻に於いて、光源氏と藤壺との密通を手引きし、春宮＝冷泉の出産までを取り計らった女房であった。そして同様に、夕霧も、柏木－女三宮の密通事件、そして不義の子の誕生を知る人物である。つまり、この二人は、同型の関係性の中にある相似の存在者として共鳴している。

光源氏から冷泉への《桜の散り過ぎたる枝》を中継ぎする王命婦。柏木から薫への《偽りの笛》＝《枯れて落ちたる花の枝》をさしだす夕霧……。

すなわち、《桜の枯れ枝》は、密通の事実、出生の秘密を知る仲介者によって渡される、不義の子への符牒なのだ。知られざる真の

父の身体を背負ってさしだされた《桜の枯れ枝》は、その事件を知る人物の手で不義密通の子にもたらされ、父の存在を語らぬままに告げる言表装置となる。

七　薫は　枯れたる花　朽ちたる木を招喚する

さて、「花の枝の枯れて落ちたるを取りて見せたてまつりて、招きたま」うた夕霧の身振りに、御簾の隙間から出て来て「走りおはしたり」という反応を示す薫は、如何様に《花の枯れ枝》との連動を成すのか。

ここからは、《枯れ落ちたる花の枝》に走り寄るという姿態を呈していた幼い薫と《枯れたる花》とが、その後も強い共鳴関係を以て結び合う様を眺めてゆく。

『源氏物語』に顕出する登場人物の中には、枯れているとか朽ちているとか称される存在者たちがいる。

「燈などの消え入るやうにて果てたまひぬ」藤壺（薄雲　一六八頁）や、「まことに消えゆく露のここちして、限りに見たまへば」「明け果つるほどに消え果てたまひぬ」紫上（御法　一一三頁）、また、「泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ」柏木（柏木　二九五頁）……等々、『源氏物語』の存在者たちは、その死に際して固有の形容を有している。そんな中にあって、大君なる人物は、その今はの際に、《枯れたる花》と連接する存在者なのであった。

世の中をことさらに厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ、見るままにものの枯れゆくやうにて消え果てたまひぬるは、いみじきわざかな。[15]

（総角　一〇九頁）

大君が、その最期に「ものの枯れゆく」という言葉を有するのも、[16]一切の食事を拒否し「痩せ痩せ」になってゆく「総角」巻の展開に於ける必然なのかも知れず、そこから「彼女の意志による死の選択」が論じられるのも、[17]首肯けぬわけではない。

だが、次の「宿木」巻のくだりを見よう。

亡き姉大君の面影を妹に重ね、追懐と恋慕の念を持ちながら、薫は中君に「折りたまへる」朝顔の花を、御簾の内から「やをらさし入れ」る。

［薫］よそへてぞ見るべかりけるしら露の契りかおきし朝顔の花

ことさらびてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよ、とをかしく見ゆるに、置きながら枯るるけしきなれば、

［中君］消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露のなほぞまされる

何にかかれる

（宿木　一七一頁）

「置きながら枯るる」朝顔、「消えぬまに枯れぬる花」が、大君によそえられることついては既に説かれているが、[18]生前、物を食することなく「痩せ痩せ」であったことが問題とならぬ「宿木」巻に至っても、なお、薫の周囲に存在する女君が《枯れたる花》と接合せられてあることに目を留めておこう。

そしてまた、更に、薫の周囲には《枯れたる花》のみならず《朽ちたる木》までもが招喚されて来る。

宇治の地で、薫の語らいの相手となっていた老女弁君は、きまって「朽木」なる言葉を担う存在者であった。

［弁君］「……はしたなくおぼえはべりて、えさし出ではべら

で、深山隠れの朽木[19]になりにてはべるなり。……」
（橋姫　二九七頁）

また、次の弁君の歌。

［薫］やどりきと思ひいでずは木のもとの旅寝もいかにさびしからまし

とひとりごちたまふを聞きて、尼君、

［弁君］荒れ果つる朽木のもとをやどりきと思ひおきけるほどの悲しさ
（宿木　二三四頁）

また、薫の心内。

さて例の朽木のもとを見たまへ過ぎむがなほあはれなれば、そなたざまにおはするに、……
（宿木　二五七頁）

或いはまた、横川僧都の母尼も《朽ちたる木》としてある。

薫に母尼の話をする僧都の言。

［横川僧都］「……なにがしが母なる朽尼のはべるを、京にはかばかしき住処もはべらぬうちに、かくて籠りはべるあひだは、……」
（夢浮橋　二六〇頁）

確かに、これらは、老いたる女性の自己卑下、謙遜としてあるのだろう。しかし、老女にあらずして、「朽木」なる言葉を有する女君たちがいる。

姉妹の未来を憂うる姉大君が、妹中君の将来を案じ、薫に語った言。

［大君］「……深山隠れには心苦しく見えたまふ人［中君］の御上を、いとかく朽木にはなし果てずもがなと、人知れずあつかはしくおぼえはべれど、いかなるべき世にかあらむ」
（総角　一四頁）

妹中君の行く末を案ずる言の中に、己と妹との零落せる姿が想定されている。

或いはまた、小野の地で出家を果したものの、なお懊悩を深める浮舟の様。

思ひよらずあさましきこともありし身なれば、いとうとまし、すべて朽木などのやうにて、人に捨てられてやみなむ、ともてなしたまふ。
（手習　二四二頁）

『源氏物語』に於いて、「朽木」「朽尼」という語は、薫を巡る宇治の女性たちにしか発露しない。但し、この理由を、宇治十帖という枠組の性質とか、薫という人物の性格とかに帰するのは忌避しよう。薫という存在者のみが持つ、《枯れたる花》《朽ちたる木》との共鳴力を感知すべきなのだ。

思えば、「竹河」巻に於いて、薫は、玉鬘の女房と次のような遣り取りをしていたのであった。

［宰相君］折りて見ばいとどにほひもまさるやとすこし色めけ梅の初花

口はやし、と聞きて、

［薫］「よそにてはもぎ木［槁木・枯木］なりとや定むらむ
したににほへる梅の初花

さらば袖触れて見たまへ」
（竹河　二〇八頁）

薫の好き者ならぬ様子を「すこし色めけ」とからかう女房に対して、「もぎ木」という語が置かれているわけだが、「色めけ」もしくは「ねぢけたる色好み」（横笛　三二四頁）と称されながら、結局その周囲に招来する女たちが悉く《枯れたる花》《朽ちたる木》であったのは、何とも皮肉なことだ。或いは、かかる情況こそが、

「ねぢけたる」「もぎ木」に相応しいものであったのか。

ともかくも、「横笛」巻の、夕霧が《花の枯れ枝をさしだす》くだり、薫が筍にしゃぶりつくくだりが、薫という存在に波動を及ぼしていると見てよかろう。「横笛」なる巻は、薫と「朽木」たる女たちとの強い共鳴関係の力源となっている。

八　横笛巻は　如何なる共鳴力を持っているのか

以上、「横笛」巻の《花の枯れ枝》が、柏木の形見の笛の代わりとしてあること、それが亡き柏木の存在を背負ったものであることを述べた。また、「若菜上」巻との共鳴から、そこに蹴鞠の庭＝密通の端緒が折り重なること、「須磨」巻との連動から、それが不義の子への符牒としてあることを述べた。更に、成人した薫の周囲には、「横笛」巻の力動を受け、《枯れたる花》《朽ちたる木》によそえられる女たちが招喚されることを述べた。

前稿で論じたように、薫のしゃぶりつく筍が、笛竹ならざる笛・未成熟の笛であるならば、また、本稿で論じたように、《花の枯れ枝》が、笛の代替品・偽りの笛であるならば、「横笛」という巻に於いては、薫は、徹底的に柏木の形見の笛を手にし得ぬようにされてあるといえる。ただ、その後、成人した薫は、「宿木」巻に於いて、ようやく、そしてただ一度だけ、その笛を吹く。ちなみに、「宿木」巻には、「横笛」巻の光源氏の言「ねぢけたる色好みかな」と共鳴する語「ねぢけ」「色好み」が散見する。

しかし、この、「ねぢけたる色好み」の問題、「横笛」「宿木」二巻の強い共鳴関係については、更に検覈を要する問題として、稿を改めて考えねばなるまい。

※　本文は、新潮日本古典集成『源氏物語』一～八に拠り、巻名とその頁数とを附した。
なお、……は省略したところ、［　］内は私に補ったものである。

註

(1)　玉上琢彌『源氏物語評釈　第八巻』二一一頁

(2)　野口武彦『花の詩学』朝日新聞社・一九七八年
河添房江「花の喩の系譜」（『源氏物語の喩と王権』有精堂・一九九二年）
原岡文子「『源氏物語』の「桜」考」（『源氏物語　両義の糸』有精堂・一九九一年）

(3)　新しい論稿では、
小林正明「『源氏物語』王権聖樹解体論―樹下美人からリゾームへ―」（『新物語研究四　源氏物語を〈読む〉』若草書房・一九九六年）
が、「花を「折る」こと」を「「折る」主体の欲望の発現形態」とし、その「エロスや法の領域にかかわるある種の作用」を考察してゆく中で、「折られた花の贈与と受託」の「フェティッシュな効力」を論じているが、このくだりについては、「幼年にしてすでに薫の花の枝は枯れていた。」と述べるに留まる。

(4)　拙稿「連動する源氏物語―笛を吹くこと―」（『詞林』第二一号・一九九七年四月）
以下「前稿」とはこれを指す。本稿と併せ読まれれば幸いである。

(5)　新日本古典文学大系『源氏物語　四』五九頁－註一六
は、夢の中の柏木の歌「笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき音に伝へなむ」を註して、「「こと」に「子と」をかけるか。もしそうなら、ここで亡霊はこの世に子孫を残していることを友人にはじめて明かす」としている。

(6)　この蹴鞠のくだりの「空間」「場」については、次の論稿を参照。
松井健児「『源氏物語』の蹴鞠の庭―六条院東南の町の空間と柏木―」（『論集平安文学一　文学空間としての平安京』勉誠社・一九九四年）

(7)　今西祐一郎「女三宮と「山桜」」（『國語國文』一九九六年三月）
に、これらの歌の精緻な分析がなされている。

(8)　現代の多くの註釈書の中にあって、例外的に、
新日本古典文学大系『源氏物語　四』三七頁－註一五・註一七
は、この贈答歌に、落葉宮・柏木をよそえることなく訳を附している。

(9) この贈答歌の表現については、次の論稿を参照。
廣田收「花の景としての都―須磨・明石巻を中心に―」(南波浩編・廣川勝美編集『源氏物語　地名と方法』桜楓社・一九九〇年)

(10) 「時しあらば」には引歌が期待されるが、どの註釈書も「未詳」としている。しかし、
新日本古典文学大系『源氏物語　二』二〇頁-註一〇
は、「参考」として、「柏木」巻の御息所の歌「時しあればかはらぬ色ににほひけり片枝かれにし宿の桜も」を挙げている。ともに同一の古歌を引いたのであろうか。或いは、近年流行の術語〝物語内引用〟〝逆照射〟などを以て説くことも出来るだろう。しかし、ここでは、「柏木」「須磨」二巻の連動、及び、〈散りたる花〉＝光源氏と、〈枯れたる花〉＝柏木との強い共鳴を見るに留めておく。

(11) 例えば、次のように註されている。
「三月の末という今の季節にもふさわしく、源氏の今の身の上にもふさわしいものとして選んだのであろう。」(新潮日本古典集成『源氏物語　二』二二一頁-註九)
「「時うしなへる」わが身を擬する。」(新編日本古典文学全集『源氏物語　二』一八三頁-註一三)

(12) ちなみに、「須磨」巻には、須磨退居前に「花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭の、いと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて」(二〇七頁)という情景や、巻末近くに「須磨には、年かへりて、日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに」(二五〇頁)という情景を見ることが出来る。この巻では、光源氏と桜とが連接を果し、鎖列を成してある、といえよう。

(13) 前掲註(3)小林論文は、「須磨」巻の《花の枯れ枝》にも言及している。氏は、「花を折ること」及び「折られた花の贈与と受託」を考察する中で、この「須磨」巻の《花の枯れ枝》を「王権幻想の聖樹の枝」とし、それが光源氏から春宮へと「継承され」、このとき「聖樹の死と再生とが同時に標記され」たと述べ、更に、「「散りすきたる」桜の枝は、冷泉朝を結果的に不毛の位相に呪縛している」、或いは、「皇統譜の系統樹と「散りすきたる」桜の枝のはざまで、冷泉帝の自己同一性は揺れ動いている」などと論じている。しかし、「王権」等の大いなる観念で、テクストの諸細部を押え込めるのか否か、疑問である。

(14) 新編日本古典文学全集『源氏物語　二』一八三頁-註一〇

(15) 但し、大島本は、他の多くの青表紙本と異なり、「もの隠れゆくやうにて」という本文を持つ。

(16) 「ものの枯れゆくやうに」という表現については、次の論稿を参照。
石田穣二「源氏物語における四つの死―歌語のことなど―」(『源氏物語論集』桜楓社・一九七一年)
湯本なぎさ「ものの枯れゆくやうに(『源氏物語』の心象ノート)」(『論集源氏物語とその前後　四』新典社・一九九二年)

(17) 今井源衛「宇治の大君の死」(『源氏物語への招待』小学館ライブラリー・一九九七年)

(18) 「ものの枯れゆくやうに」逝った大君、及び、その朝顔との連接については、次の論稿を参照。
原岡文子「歌語と心象風景―「朝顔」の花をめぐって」(『國文學』一九九二年四月)

(19) 次の論稿に、「朽木」という語、及び、『古今集』歌「形こそ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなむ」についての研究史のまとめと考察がある。
佐田公子「み山隠れの朽木と花―兼芸法師の歌一首小考―」(『研究と資料』第三〇輯・一九九三年一二月)

【附記】
本稿は、修士論文「聯動する源氏物語―「横笛」巻の力と線―」(一九九七年一月九日提出)の一部をもとにしたものである。

――本学大学院博士後期課程――